

佐々木千枝。裁縫が得意な11歳の女の子。彼女は第三芸能課のメンバーの中では目立たない印象を受けるが、注目してみればとても大人びた女性であることがわかる。すみれ草のように、自分を着飾ることはなくとも、凜として咲くその姿。彼女の夢である「大人の女性」は、実は千枝自身がメンバーの中で最も近い人物なのだ。

× × × × ×

「バレンタインコーデ……ですか？」

千枝は心許ない小さな声で聞き返した。彼女のおどおどとした態度とは対照的に、目の前に立つ女性……桐生つかさは自信ありげにうなずいて見せた。

「そうっ！ 今度のファッションショーのテーマ！ また協力してほしいんだよっ！」

第三芸能課の事務所に彼女の大きな声が響きわたる。つかさは千枝の肩に勢いよく両手を乗せた。一瞬、体を震わせる千枝だったが不思議と心は落ち着いている。自分とはまったくタイプは違っていたが、千枝にとってつかさは『カッコいい大人の女性』であったからだ。

「す、すごいじゃないか、佐々木さんっ！」

そばに立っていたプロデューサーが興奮げに千枝に言う。それに倣うように、第三芸能課のメンバーも千枝に駆け寄ってきた。

「千枝ちゃん、すごーいっ！ 本当のファッションデザイナーさんになるんだっ！」

「小春、千枝ちゃんが作ったドレス、また着てみたいです～」

そう言って千枝の両手をとるのは二人の少女……赤城みりあと、古賀小春だ。彼女たち3人は、先日つかさが社長を務めるアパレルブランド『kasa Blanca』のファッションショーにモデルとして参加した。結果、ショーは大成功。千枝たちの活躍は、各種メディア・SNSで大きな話題となった。特に訳あってドレスのお直しを担当した千枝は、まだ小学生という年齢もさることながら、卓越したそのデザインセンスに業界は衝撃を受けることとなった。

当然、現役JKアイドル兼敏腕凄腕社長である桐生つかさが、そんな人材を放っておくはずがなかった。

「この前のイベント、めっちゃくちゃ盛り上がっただろ？ だから今度は最初から千枝がプロデュースしたドレスでやりたいんだよ！」

「さ、最初から……？」

「千枝が思うように進めてくれればいい。アタシはそれを全力でサポートする。悪い話じゃないだろ？」

「……」

矢継ぎ早に言葉をつむぐつかさ。だが、対する千枝の表情はどこかさえない。そのことに気づいたのか、そばで様子をうかがっていた少女……橘ありすが口を開いた。

「今回もまた、佐々木さんにランウェイを歩いてもらうんですか？」

「もちろん！ ドレスの着こなし方はデザイナー自身が一番わかってるからな！ なあ、千枝！」

つかさは千枝の目線の高さまで腰を落とし、彼女の顔をのぞきこんだ。

「……」

しかし、彼女の顔は相変わらず、晴れない。終始笑顔のつかさだったが、しばらくしてそのことに彼女も気づく。

「千枝……？」

「……あ、あの」

勇気を振り絞るように、顔を上げる千枝。しかし、つかさと目が合うと、また顔を伏せてしまった。

「……少しだけ……考えさせてください」

彼女の言葉に心配そうに第三芸能課のメンバーたちが顔を見合わせる。

「……」

その中でありすは、うつむいて唇をかみしめる千枝をずっと見つめていた。

× × × × ×

高台にある公園のベンチに千枝は一人座っていた。眼下に広がる街の風景を彼女は見つめている。肌寒い冬の風がどこからともなく現れ、千枝の髪を揺らし、またどこかへ消えていく。千枝は大きく息を

吸った。冷たい空気が彼女の鼻孔をくすぐる。湿った空気の感触。1月の曇り空はどこかもの悲しい雰囲気

が漂っていた。

「何してるんですか、こんなところで」

突然の声に肩をすくめる千枝。おそろおそろ振り返ると、ベンチの後ろにありすの姿があった。

「ありすちゃん……」

「……橘です。隣、座ってもいいですか？」

「……」

千枝の無言を肯定と判断したありすは、彼女の隣へと品よく座った。

千枝はありすの様子をちらとうかがう。

「……がっかり、させちゃったよね……？」

「何がですか？」

言葉通り、何でもない風に聞き返すありす。しかし、その言葉が彼女のやさしさから来るものだと、千枝は気づいていた。

「……つかさんにステージに出させてもらった時、すごくうれしかったんだ」

千枝はぼつりぼつりと言葉を紡ぎ始める。

「人前に出るの、アイドルなのに苦手だったけど……みりあちゃんも小春ちゃんも一緒に出てくれて」

千枝の脳裏に、あのときの光景があざやかに浮かび上がった。

スポットライトに照らされたきらめくステージ……ランウェイを千枝のあこがれである大人の女性たちが次々と歩いていく。思い出だけで、夢のような光景だった。

そしてそんな舞台に、まさか自分が立てるだなんて。

「今でも……夢だったんじゃないかってくらい、きらきらしてた」

千枝の唇に自然と笑みが浮かんだ。しかし、それは風にさらわれるように消えてしまう。

「……だから思ったの。千枝には、まだここに立つ資格はないんだって……」

それが千枝の本心だった。実際に立ってみてわかったあこがれの舞台。すべてが光り輝き、夢と希望に満ちあふれたステージ。それはアイドルの……いや、夢見るすべての女の子のあこがれの場所であった。

……だからこそ、わかってしまったのだ。自分がまだ、その域に達していないのだと。

「みんながあの場所を目指して、レッスンや練習をしてるんだって思ったら……千枝だけがまた、なんて……」

一足飛びに立つことができた夢の舞台。しかし幸か不幸か、その経験は千枝にとって自らを縛る枷となってしまうていた。

……夢とは呪いにも似て、まだ幼い少女を締め付けるのだ。

「千枝は……みんなに比べたら……何も」

その時だった。

「にゃんっ！！」

「ふえっ！？」

千枝の顔の前に、何かやわらかいものが押しつけられた。突然の感触に声を上げる。近すぎるそれから顔を離し、当てられていたものをまじまじと見つめる。それはハンカチで作られた猫のパペットだった。

「……あ、ありすちゃん？」

千枝はそのパペットの主……ありすを見やる。当の本人は、顔を赤くしてそっぽを向いていた。

猫のパペットが千枝に話しかける。

「〈千枝ちゃんはどうしたいのかニヤ？〉」

「え……？」

「〈みんながどうとか、自分なんてとか……そんなことばかりニヤ〉」

パペットが一際、大きく揺れ動く。

「〈それじゃあ千枝ちゃん自身が、どうしたいのかわかんないニヤ〉」

「ち、千枝が……？」

千枝は目を丸くする。そして、その言葉が体の中に染み込んでいくのを感じた。

自分自身がどうしたいか……何度もその言葉を咀嚼する。そして……千枝は初めて自分の中にある感情に気づいた。胸の中の奥の奥……小さな、だけど決して消えない光り輝くもの……。

「……あのステージに立ちたい」

それは言葉となって口から漏れ出ていた。

「本当は……またランウェイを歩いてみたい。もっと……もっとみんなと一緒に輝きたい……！」

アイドルとしての矜持か……夢見る少女の思いの丈か……それはわからない。しかし、その強い思いは、千枝の小さな体を駆けめぐっていた。

「……やっと笑ってくれましたね」

パペットではなく、ありすの口から言葉が紡がれる。薄い唇にほほえみを称え、安心したように千枝を見やる。

「ありすちゃん……」

ほろり、と千枝の瞳から涙がこぼれた。

「え……ええッ！？ さ、佐々木さん、大丈夫ですかッ……！？」

突然のことに取り乱すありす。千枝は涙を拭いながら、ありすへと笑いかける。

「ち、違いの……。ありすちゃんの顔見たら安心しちゃって……。どうしてだろう……。ごめんね」

「わ、わたし、何か変なこと……」

と、自分の手にはめられた猫のパペットに気づくありす。あわててそれを後ろ手にしまう。千枝にはその姿がさらに笑いを誘った。

「ありすちゃんの猫ちゃんの声がかわいくって……。くすっ……。うふふふ……」

「わ、忘れてくださいッ！ もうッ、もうッ！！」

ありすが顔を真っ赤にしてハンカチを振り回す。小さな悲鳴を上げながら、千枝は楽しげに逃げ回る。

「あ……」

ふと、千枝は自分の鼻先に冷たい刺激を感じ、顔を上げる。空からふわり、と白い雪が舞い落ちてきていた。

ありすも動きを止めて舞い散る雪に息を呑む。雪はやがて勢いを増し、千枝とありすを包んでいく。

「……」

千枝はそっと手のひらを広げる。舞い落ちた雪は一瞬形を止めた後、体温に溶かされて霧散する。千枝の手のひらに優しい冷たさが残った。

「ホワイトバレンタインに……。なればいいですね」

ありすがスカートの裾を持ち上げる。そしてやや仰々しげにターンをして見せた。

「あ……」

舞い散る雪の中で踊る彼女を見て、千枝の脳裏に幼い日の記憶がよみがえった。それは両親に買ってもらったプレゼントの記憶だ。きらめくラメがちりばめられたスノードーム……。その中で美しい羽根を持った妖精がダンスを踊っていた。そのイメージは時間を超えて、目の前のありすと重なる。

「あはは……また恥ずかしいことをしてしまいました」

ありますが照れくさそうに頬をかく。だが、真剣に彼女の顔を見つめていた。

「ありすちゃん……すごくきれい」

「え？」

またしても千枝の目に涙が浮かぶ。しかし、それが頬を伝うことはなかった。

「ありがとう、ありすちゃん……ありがとう」

彼女の満面の笑みが、こぼれそうになる涙を押しとどめたからだ。ありすは千枝に微笑みを返す。まるでスノードームのように、二人を降りしきる雪が優しく包み込んでいった。

× × × × ×

2月14日。この日はありす……そしてみんなの願いが叶ったように、昼を過ぎたあたりから雪となった。東京で見られる雪は珍しく、街の人々はその美しさにささやかな歓声を上げた。しんと降り続

く粉雪は幻想的に街を彩る。それは行き交う人々に平等に降り注いだ。ショッピングモールを手を繋ぎながら歩く親子……想い人に渡すプレゼントを選ぶ女子学生……寄り添いながら歩く初老の夫婦……。

そして未来に歩みを向ける、少女たちの頭上にも……。

「あれ、なんかやってんの？」

連れだって歩く男子高校生のひとりが、そのイベントに気づいた。ショッピングモールの一角、吹き抜けとなっているその場所に、大型のスクリーンモニターが設置されていた。モニターには『Kasa Blanca』のロゴが踊っている。そしてその前には全長50メートルほどあるランウェイが引かれていた。周りには数十人の観客が待ちかまえ、ステージへと期待のまなざしを向けている。

その時、辺りの照明が落とされ、同時に音楽が鳴り響いた。

「え、あれって……！？」

今度はそこにいた男子全員がステージに釘付けとなった。スポットライトが飛び交う中、現れたのはあの有名アイドル……桐生つかさだったからだ。

そして驚くことはもう一つ……つかさの着ている衣装が、メイド服だったことだ。フリルのついた白のエプロンと、ビターブラウン色のスカート。可憐なカチューシャとエプロンの胸元には差し色に淡いブルーのリボンが結ばれている。普段の彼女からは、想像のつかないコーデだが、ランウェイを歩く毅然としたつかさの姿は見るものを圧倒した。ステージ端の女性客から歓声が上がる。ステージ上でつかさはスカートを軽く持ち上げ、ウインクをして見せた。さらに歓声が沸き起こる。

可憐さとスマートさが渾然とした佇まいに、男子たちは圧倒されるばかりであった。

「……」

つかさは千枝から渡されたデザイン画をめくり直す。10枚に満たないその冊子を繰り返し、繰り返し、目を通す。もう10回はそれを繰り返しているのだった。

「あ、あの……」

沈黙に耐えかね、千枝は声を出す。そのボリュームは自分でも聞き取れたか怪しいもので、テーブルを挟んで座るつかさに届いたかどうか定かではなかった。

「つかささんのイメージとは違うかもしれないけど……バレンタインだから思い切ったデザインでもいいと思うんですっ……」

消え入りそうな声だったが、芯ははっきりとしたものであった。

あの日、雪の中で舞うありすの姿を見て、千枝の中で形どられたイメージ……。そのイメージをみりあに伝えてアドバイスをもらう……。それを小春がデザイン画として描き起こす……。自分だけではない、周りの力も借りて出来上がったデザインなのだ。

息をついて、つかさがようやく資料を閉じた。そして、真剣な目つきが千枝を射抜く。その顔は女子高生アイドルとしてではない、デザインブランドの経営者としての顔だった。

「……千枝」

「は、はいっ……」

次の瞬間、つかさの顔がぱっと破顔した。

「やっぱ、最高だよお前！」

「……！ あ、ありがとうございます……っ！」

つかさの言葉が体に染み込んでいく。あこがれの女性に誉められて、体の中にくすぐったいような不思議な気持ちが沸き起こる。

「……それにしてもバレンタインにメイド服かぁ～。やば、恥ずかしくなってきたかも……」

つかさは照れ隠しに手のひらで顔をあおぐ。顔を赤らめる様は年相応の女の子の姿に見えた。

「アタシに似合うかな～」

「も、もちろんですっ！」

千枝は思わず立ち上がった。

「つ、つかささんなら、きっと何でも似合いますっ！」

彼女の普段とは違う力強さに一瞬、呆気にとられるつかさだったが、すぐに笑顔を向ける。

「あはは、サンキュ。んー、でも……そうだなあ……」

つかさはあごに手を当て、何かを逡巡している。そこにも女子高生らしい……いや、小悪魔的で、いたずらっぽい表情が浮かんでいた。つかさは含み笑いを称え、あごに当てた指を千枝へと向けた。

「やっぱりメインはお姫様にしてもらわねーとな？」

「……ふえ？」

今度は千枝が呆氣にとられる番であった。

× × × × ×

七色のスポットライトが交差するステージを、千枝は舞台袖から見つめていた。ステージの中心にいるのはもちろん、桐生つかさだ。ここから見ていても彼女の存在感は圧倒的だった。似合うかどうかわからないと言っていたメイド服も、完璧に着こなしている。それどころか、今までにない新しいイメージを観客に魅せつけていた。

「千枝ちゃん、そろそろ準備いいかな？」

「は、はいっ……」

スタッフから声をかけられて身を正す。スカートの端を握りしめる。

……まさか自分がメインを任せられるなんて……。

千枝の頭に何度したかわからない考えが浮かぶ。ランウェイを歩くことは決まっていたが、つかさを差し置き、最後を飾る人間に選ばれるとは夢にも思っていなかった。そしてそれを決め手のは他でもな

いつかさ自身だ。あの時の彼女の顔が脳裏に浮かぶ。千枝を信じて送り出す屈託のない笑顔……。それは子供に向けるものではない……。対等な存在に向けるものだった。

……。恥ずかしいところは見せられない。

つかさはこのステージの成功を自分に託してくれたのだ。彼女だけではない。第三芸能課のみんなの力もあって、自分は今この場に立てている。それを今、千枝はひしひしと感じていた。

彼女はもう一度、ステージ上のつかさに目を向ける。ずっとあこがれていた『大人の女性』。手を伸ばしても自分には届かないと思っていた存在。そこへの至るまでの距離は、きっと今も変わらない。途方も、途方もない遠さ。だけど……

……。千枝もアイドルなんだから！

この一歩がそこに繋がっていると信じて。

千枝はきらめくランウェイへと身を踊らせた。

× × × × ×

重要なのは〈何が彼らを刺激したか〉だった。

人によっては目を伏せるような汚らわしさと断罪するかもしれない。あるいは健全な男子学生の姿だと言う人もいるだろう。もしくは受験や人間関係、将来の不安への行き場のない感情のはけ口という見方もできるかもしれない。

... ..ひとつ言えるのは、彼女のアイドルとしての輝きが、その一端を担ったということだった。

× × × × ×

まばゆいライトに照らされ、少女はステージへと舞い降りた。

「うおッ... ..! ?」

男子学生のうちの一人が思わず声を上げた。彼らの間に当人をからかう笑い声上がる。

しかし、それも仕方のないことだった。ランウェイを歩く少女... ..佐々木千枝の姿はあまりにも魅力的だったからだ。

千枝のコーデはつかさとコンセプトが同じのメイド服... ..しかし、趣はまた違ったものだった。水色のパステルカラーを基調としたミニスカスタイルのメイド服... ..白いエプロンに面積は小さめで、それが女の子らしい雰囲気演出している。腰に巻かれた白のリボンはやや長めに作られており、胸もとには黒の可憐なリボンが置かれている。リボンと同じ色の黒のタップシューズと、これまた対照的な真っ白なニーソックスがまぶしく見える。前髪をまとめるうさぎの髪留め、そしてバレンタインならではの

チョコレートカップケーキを模したヘアアクセサリ、白と青の小さめのカチューシャ。普段の千枝の可憐さを残しながら、それでいて非日常を感じさせるコーデであった。

小さな妖精……見たものはそう感じずにはいられなかっただろう。

観客全員が同じ考えだったのか、千枝の姿には大きな歓声が上がった。歓声に応えるように手を上げ、笑顔を振りまく千枝。凜とした佇まいであったつかさとは対照的だったが、それが彼女のアイドルとしての振る舞いだった。

「……めっちゃかわいい」

男子学生の別のひとりがつぶやく。それが大勢の歓声にかき消されたからか……それとも異議がなかったのか……今度は誰も笑うことはしなかった。

千枝がランウェイを渡りきり、ステージ中心で足を止める。そしてそこでターンをしてみせた。顔に手をかざし、観客に向かってウィンクをする。一斉に湧く観客席。普段の千枝からは想像できない大胆さだった。

「……」

最初の照れ笑いが嘘のように、男子学生たちは千枝の姿に魅入っていた。彼女は自分たちより一回り近く年下の女の子だ。しかし、その堂々としたふるまいは、同学年の女子たち……もしかしたらそれ以上に大人びて見える。口に薄く塗られたチークが、可憐な少女の妖艶さを引き立たせていた。

その時、一陣の冬風がステージ上を吹き抜けた。

「ひゃ……っ！？」

おおッ……！？ と、誰からともなく声が漏れていた。ふきぬけになっているショッピングモールのステージ。普段は天窓に覆われているが、雪の舞うシチュエーションの貴重さから今日はあえてそのままとなっていた。そのため、大通りに吹き付ける風が、ここにも紛れ込んできたのだろう。

そしてその風は、千枝のスカートを大きく揺らした。思わず小さな悲鳴を上げ、とっさに片手でスカートをおさえる。そのおかげで下着を見せることはなかったが、少女の白いふともものかなりの部分までめくり上がる場所であった。

一瞬、千枝は困ったような照れ笑いを浮かべた。しかし、そこからきちんと立て直し、観客へ向かってアピールを終える。そこでの観客からの声援は、今回のイベントで最大のものとなった。ランウェイを去る彼女の姿を見送る観客たちの視線は、もはや保護対象である少女に向けるものではなく、一種の羨望の対象ですらあった。

……先ほどの男子学生たちの、邪な視線を覗いては。

× × × × ×

イベントが行われたショッピングモール内にあるファストフード店……その一角を陣取り、男子学生たちが雑談を行っていた。人数は5人。いつもつるんでいる同じ高校の仲間たちだった。といってもいわゆる『陰キャ』集団ではなく、部活も勉強もほどほどに、放課後はこうして友達同士でだべる普通の男子高校生たちだ。

「にしても最後の子可愛かったよな～……」

一人がジュースのストローを噛みながらしみじみとつぶやいた。とたんに仲間内で笑いが起こった。

「お前、やっぱりロリコンかよッ！」

「べ、別にそういうんじゃないよ……！」

しかし、その笑いはどこか上滑りをしている。皆がさきほどの少女を頭の中に思い描いているからだ。先ほどのステージ上での彼女……妖精のような姿は思春期の男子高校生の脳内に強烈に焼き付いていた。

照れ笑いのあと、彼らの間に気まずい沈黙が流れる。それは幼い少女を性的な目で見ている気恥ずかしさからだった。

ショッピングモールの向こうから歓声が上がった。その声につられて男子たちがそちらに目を向ける。

……メイン通路、そこを桐生つかさが観客に手を振りながら歩いていた。彼女はステージを終え、ファンサービスとしてショッピングモールを練り歩いているのだ。その圧倒的な美貌に周囲の人間たちはあらためてため息をもらす。

「……！　おい、あれ……！！」

だが、高校生たちの視線はその後ろを行く少女へと向けられていた。

……困り顔をしながらもファンたちへと手を振る幼い女の子へと……。

×　　　×　　　×　　　×　　　×

「つ、つかささん……もうそろそろ……」

千枝はつかさのドレスの裾を頼り気なくつかんでいた。周囲に気取られないように手を振ることはもちろん忘れない。彼女の小さな声は、はたしてつかさには届いたようだった。得意げな表情で応える。

「千枝のメイド姿、あそこでしか見られないなんてもったいねーだろ？　そのめっちゃキュートなの、見せつけてやれよっ」

つかさはファンに向かってさらに投げキッスをしてみせた。さらに湧く観客たち。千枝は熱気にやや押されがちだが、ごこちない笑顔で手を振る。

「(……?)」

と、ファンの中から熱狂的な視線が向けられているのに千枝は気づく。

横目でそちらに視線を向ける。ファーストフード店のオープンスペースの席……数人の高校生たちがいるのが見えた。彼らは椅子から身を乗り出して、こちらをずっと見ていた。一人の男子はスマートフォンを向け、歩く千枝にレンズを向けている。

「(……なんかやだなあ……)」

幼いながらアイドル活動をしている千枝にとって、スマホを向けられるのは別段めずらしいことではない。だが、にやついた笑いを浮かべた彼らの姿に、千枝の体は寒気を感じていた。まるで大きな手に、全身をくまなく撫でられたような感覚……。

「あ、あの……」

鳥肌が立つのを感じて、千枝はつかさのドレスをまた強く握った。

「ああ、ごめんな千枝。そろそろおしまいだ……」

つかさは先ほどのいたずらっぽい顔から、子供を心配する大人の表情へと戻っていた。そして辺りを見回すと、モールの一隅へと顔を向けた。

「ほら、あそこで着替えようぜ」

そこはショッピングモール内……小さなファッションストアだった。

× × × × ×

「で、これからがお楽しみでーす！！」

男子の一人がおどけた様子でスマートフォンを取り出した。笑い声と共に、他の男たちからも歓声が上がらる。

マンションの一室……時刻は夜11時を回っている。両親が長期の仕事のためにここの主となった男子生徒は我が物顔であった。気の合う仲間たちを集めた始まった宴会は佳境に入っていた。散乱するお菓子の袋と、ビールの缶……。アルコールが入った思春期の男子たちに怖れるものはない。ましてや仲間内での高揚感、彼らの理性をすでに麻痺させていた。

「撮れてんのは俺もまだ見てません！　みなさんと一緒に楽しみにしておりました！」

スマホを片手にわざとらしく敬礼をする。途端に爆笑の渦に包まれた。

「お前マジかよー！！」

「本当に撮れてんだろーな！？」

「映ってなかったら本当に死なすからなっ？」

思い思いのヤジとビールの空き缶が飛ぶ。男子生徒は笑いながら逃げつつ、部屋にあるテレビの前に立った。このマンションの本来の持ち主である彼の両親はそこそこに裕福で、テレビは65インチサイズの大型のものであった。

「うるせーんだよお前ら！　だからここで答え合わせするんだろーが！！」

男子生徒はケーブルを取り出し、スマートフォンへと接続した。その片方をテレビの端子へとつなぐ。少しのタイムラグのあと、テレビにスマホの映像が映し出される。男子はさらにスマホを操作する。

そして大画面に映された画に、他の男たちから感嘆の声が上がった。

... ..そこにはあのショッピングストアの、試着室の光景が映し出されていたからだ。

× × × × ×

ショッピングセンターでファッションショーが開催されるのは珍しいことではない。イベントでの集客、新規ブランド店の立ち上げなど理由は様々だ。しかし、問題となってくるのはスタッフルームの確保だ。貸し切ったフロアで行われる催しとは違い、専用の部屋を用意できるわけではない。必然的に、もともとある施設を用意することが手っ取り早くなる。

... ..だから、つかさの選択に間違いはなかった。ステージが終了したあとにファンサービスのためにショッピングモールを凱旋しようと言い出したのは彼女だ。そして儂げな千枝の姿を見て、身を案じたのも彼女。本来なら別のブースでの衣装交換を予定していた。しかし今にも消え入りそうな少女の姿に、若き女社長はあせってしまった。

『ほら、あそこで着替えようぜ』

....そこが少女に劣情を抱いている、男子生徒のバイト先だとは、誰も知らなかったのだ。

地獄への道は、善意によって舗装されている。

× × × × ×

スマホの持ち主の男子は得意げだった。わざとらしくテレビに肩肘を乗せる。男子たちがどっと湧く。

「マ、マジで撮れてんだろーな....」

一人がどもり気味に静止した試着室の映像を見ている。彼は千枝に向かってスマホを向けていた男だ。

「だからそれを確かめようとしてんだろ……お前もスマホ貸せ」

テレビ前の男子は彼からスマホをひったくように取り上げた。そしてもう一台用意してあったテレビ（こちらは40インチのやや小さめのものだ）を引っ張り出した。そして先ほどそうしたようにそのスマホもケーブルでテレビに接続した。こちらに映し出されたのはランウェイの映像だった。桐生つかさの後ろ姿が、今まさに舞台袖へと消える場面で静止している。……次にステージへと出てくるのは、メインであった千枝の番だった。

それを見て、男子たちから爆笑が巻き起こる。

「おめー鬼畜過ぎだろーっ！！」

笑いながらも男たちは横目でその画面を気にしている。今日見た妖精のような少女の姿が脳裏にフラッシュバックする。設置された2台のテレビはいまや欲望にまみれた視線が交差することとなった。

「んじゃ……そろそろ再生すっか」

男はそう言ってスマホの画面を操作する……。

誰かがビール缶のプルタブを開ける音が小さく鳴る……。

……部屋の時計が23時12分を指し示す。

まだ今日は2月14日……バレンタインデーであった。

× × × × ×

再生され始めた映像は、思いの外鮮明であった。スマートフォンは試着室に置かれた小物入れの場所に隠されていた。照明の位置との相性がよく、明るい。そして中央にある大きな鏡には今、反射したカーテンレールが映っている。鏡との場所は最適だったようで、明るい室内はほぼ全て見渡すことができた。

「うおっ……めっちゃ綺麗じゃん」

「だろ？ 何度もやって良い位置極めたかんね」

持ち主である男子生徒は得意げに言うと、他に混ざってテレビの前にあぐらをかいた。

……彼がスマホを設置したのはこれが初めてではない。あの短い時間のなかで、スマホを試着室に設置することはいくらバイト先だからといって不可能だ。彼は常習的に盗撮を行っていたのだ。彼は数台のスマホを別に持っており、この映像もあらかじめ仕掛けられていたものだった。

「んでも、これが当たりかな〜」

男子はどこか楽しげにつぶやいた。

... 鏡に映ったカーテンレールに動きはない。彼が言うようにこの試着室が利用されるとは限らないのだ。そうなればいくら映像が鮮明でも意味がない。ここに関しては完全に運任せであった。

「... お、おお... ?」

しかし、運は彼らに味方したようだった。しばらくの後、カーテンレールがわずかに揺れ動く。人の気配がその向こうから感じられた。

... そしてその人物がカーテンを開け放つ。

「... ツ! ? うおおおおおッ!!!」

彼らの歓喜の声が湧き上がった。画面に映し出されたのはあの時見た、妖精を思わせる少女... 水色のメイド服を着た千枝の姿だった。

「すげー! やったじゃん!」

「神引ききたわ!」

男たちは身を乗り出した。半信半疑だった映像に信憑性が宿り、場が一気に沸き立つ。

映像の中の千枝は、両手に私服を抱えていた。あらかじめ用意していたものだろう。上着やスカートが丁寧に畳まれ、そのうえに白い靴下が乗せられていた。品の良い彼女の性格がわかり、さらにこれからここで本当に着替えが行われるのだという実感が彼らに沸き起こる。

<<えっと ……>>

千枝は試着室の中を見渡したあと、私服を床に置かれたかごへと入れた。その際にスカートのきわどい部分がスマホへと向けられる。おおっ、という感嘆の声が男たちからまた漏れ出た。

……彼らは粹がっちはいたが、そのほとんどが実のところまだ性経験がない。童貞である彼らは幼い少女のしぐさに一喜一憂してしまっていた。

<<……>>

千枝はあの時と同じように不安げに体をかき抱いていた。設置されていた鏡に映る自分の姿をまじまじと見つめている。どこか浮かない表情。

<<……あの人たち、なんかやだったなあ ……>>

その声は本当に小さく、彼らの耳にはどういった意味かわからなかった。しかし、彼女が緊張とは違う、感情を抱いていることだけは伝わった。肌にしっかりと汗がにじんでいるのが見てとれた。

……そしてその小さな手がスカートの端をつまむ。

「……！」

誰かがごくりと唾をのむ音が聞こえた。

千枝はそのまま……

スカートをお腹までたくし上げた

ぷ り ん っ

「うおっ……！！？」

一人の男子が思わず声を上げた。

……大画面に映し出されたのは白い綿100%の女児パンツ。ふわった生地の質感まで映像から伝わってくる。お尻の部分にはリボンを模した大きなピンクのハートと、水色や黄色のいろとりどりの小さなハートが描かれている。そしてピンクのハートの中に添えられたメッセージ……『HAPPY Valentine ハート』の文字まではっきりと映っていた。

「はいストップ！」

男子がスマホを操作し、映像を止める。画面の中の千枝は、スカートをたくし上げた状態のままその動きを止めていた。男子たちの好機の視線がその下半身に注がれる……。

「ハッピーバレンタインだってよ〜！」

「やっべー俺祝われちゃった」

「やっぱ、めっちゃ画質いいなあ！！」

「あったりめーだろ！　だてに最新スマホ使ってないよ〜」

パンツのメッセージに、男たちのにやついた笑みを浮かべている。女の子の綿パンツを見るのは、小学生の時以来だろう。しかもこれだけの美少女のものだ。彼らの目が釘付けになるのも無理はない。千枝の下半身は小学生にしてはむっちりと肉感的で、ロリコンの気がある彼らには扇状的だった。鏡にはパンツの前面部分が映っており、可憐な小さなリボンがあしらわれているの見える。それがまた彼らの劣情を煽った。

「おい！　早く続き！」

声にうながされ、男子が映像を再開した。

<<ん……>>

ふわん　ふわん

千枝はスカートを何度も仰ぎ、蒸れた下半身に風を通していただった。汗の香りがこちらまで伝わってくるような錯覚がする。メイド服の美少女がするしぐさは、まるで○○のようだった。それが男たちをさらに高揚させる。

千枝は仰ぐのをやめると一息をついた。そして首もとの蝶ネクタイへと取り外す。前面を覆う白のエプロンがメイド服から離れた。頭につけたカチューシャも同じように外していく。

「やっべ……小学生ストリップ～……」

一人がおどけたようにそうつぶやいたが、誰も反応しなかった。男たちは画面の少女に魅入っており、その先を今か今かと待ちかまえていた。

そして少女は、ワンピースとなっているメイド服の裾に再び手をかけた。

<<んん……>>

ややきつめのため、脱ぐ作業に苦勞する。スカートは大きくめくれあがり、再び女児パンツが画面へと映し出された。

ぷりん　ぷりん

もどかしく脱ぐため、可愛らしいお尻がこちらに向かって振られるように動く。それをにやついた顔で眺める男たち。見ているうちに余裕が生まれたのか、顔を赤くする互いをからかい合っている。

<<んしょっと……>>

ようやくメイド服を脱ぎ終える。上半身に着ている白のインナーが顔を出す。キャミソールのようになったフリルのついたものだ。鏡に映った千枝の姿に、また誰かがつばを飲み込む。キャミソールの下からでもわかるふたつのふくらみ……小学生にしてはむっちりとしたふともも……白のハイソックスはそのままの姿に、ロリコンたちは垂涎であった。

そこで千枝がこちらを振り向いた。

「……！！」

一瞬、男たちの間に緊張が走った。実際に彼女がそこにいるわけではないのに無意識に反応してしまう。

しかしそれはもちろん気のせいで、千枝がこちらに向き直ったのは、衣服入れを探るためであった。千枝はしゃがんで、こちらをのぞき込むような姿勢となる。

<<よし……>>

そう呟くと千枝は立ち上がった。彼女の全身がくまなく見れる位置になる。

そして両手を交差させ、キャミソールの裾を掴んだ。

「……え？」

誰ともなく困惑のつぶやきが漏れた。そしてその息が吸い込まれる前に……。

千 枝 は キ ャ ミ ソ ー ル を 一 気 に ま く り 上 げ た

し ゅ る

ぶ る る ん

「うおっ！！???」

今度は大きな声があたりに響いた。大画面いっぱいには千枝のおっばいが映し出されていた。真っ白な肌のふくらみと、その先端に実る桜色の乳首……。小学生として平均的なバストサイズだが、千枝の腰

回りの細さがそれを際出させていた。小ぶりだが、存在感のあるふくらみ……。それは性に多感な男子高校生たちを魅了するには十分すぎた。

<<んしょ……>>

呆気にとられたままの男たちの前で、千枝はパンツの端に指をかける。

そして、まるでスローモーションのようにゆっくりと引き下げられていった……。

し ゅ る ん

「～～ッ！?????！！！！」

声にならない声が、辺りを支配する。乙女の秘密……まだ誰にも見せたことのない開花を待つつぼみ……無毛の一本すじが無惨にも男たちへとさらけ出されてた。

「うっはあ……！！」

一人の男子が恍惚としたため息を漏らす。きらめくような白い肌……無駄のないお腹周りだが、ふっくらと盛り上がった恥丘部分が幼いながらも女を感じさせる。こちらから見上げるような形なので、すじの上部にある包皮をかぶったクリトリスが美しく光る。ぷっくりとした少女の秘密……。それが画面にあますところなく映し出されていた。

「す、すげえ……」

男たちは生唾を飲み込み、千枝の秘密を食い入るように見る。性体験のほとんどがない男子たちは、女体に免疫などない。それが仮にいたいけな少女のものであってもだ。むしろ枷がない分、獣じみた視線は幼い少女を突き刺すようだった。

<<んん… …>>

靴下だけの姿となった千枝は、その細い肩をかき抱いた。暖房がきいている室内とは言え、2月の肌寒い空気に少女の体は鳥肌を立てる。桜色の乳首も、つんと固さを増したように見えた。

『えっと… …』

千枝はそのまま服が入っているかごへとしゃがみ込んだ。スマホのカメラ位置が彼女の下半身を捕らえる。

か　っ　ぱ　あ

「ふほお… …！」

感嘆にも似たため息がまたしても男子たちから漏れ出る。こちらに足を開いてしゃがみこむ姿勢… …
いわゆる大股開きの体勢をとったため、千枝のおま〇こは丸見えになっていた。かかとをわずかに上げ、つまさきに力を込める。それに呼応するように、彼女のぷっくりとした陰唇が震えた。

ぷにゅん

まだ未成熟なつぼみが、わずかに開いてみえた。そこからはみ出た少女の秘密はあでやかな桃色。まるでやわらかい桃から果肉がむき出されるように、恥ずかしげに震える。少女の幼さと、これから花開かんとする大人の女を感じさせる光景だった。

<<確かこのへんで.....>>

その姿勢のまま、かごの中身を探り始める千枝。カメラからは彼女の愛らしい顔.....桜色の乳首.....そして未成熟なはみ出しおま○こがあますことなく映されている。かかとを付けたまま、足を大きく開いたその姿勢は、普段の清楚な千枝の姿からは想像もできないはしたないものだった。

ごくりと、またしても生唾を飲み込む生々しい音が聞こえた。そしてかちゃん、という何かが落ちる音。それはもう一つのモニターに設置した、スマホが落ちる音だった。

その衝撃で、あの時の動画が再生されていく。

.....歓声が響きわたる。まばゆいライトを全身に浴びて、パステルブルーのメイド服に身を包んだ千枝が、ランウェイに身を踊らせる.....。

<<んっしょ.....>>

...千枝はようやく目当てのものを見つけた。そしてカメラに向かって見せつけるようにそれを広げた。映し出されたのは替えの下着...それは同じく綿100%の女兒パンツだ。まっしろな生地と、その上に散りばめられたいちごマーク...。まるでショートケーキを思わせる可愛いパンツ。ほのかな甘い香りさえ伝ってくるように、大画面に映し出されている...。

...ランウェイ上の千枝は、笑顔で観客席へと手を振る。普段は見ることのできない彼女の表情。それはここまで苦難を乗り越えてきたものからくる自信のあらわれだ。彼女はこの瞬間、アイドルとして舞台に立っているのだ...。

<<んっと...>>

...千枝はパンツの足を入れる部分に指を通し、大きく広げた。俗に言うパンツあやとりの形だ。そしてクロッチ部分をまじまじと眺める。おま〇こがあたる場所が汚れていないか、チェックしているのだ。カメラに向けて広げられた女兒パンツ...。こちらに見せつけるような淫靡さを感じさせるそのしぐさは、男たちの劣情を激しく刺激した。

「はあ...はあ...ッ！！」

かちゃ...かちゃ...

荒い息がどこかから漏れ出た。そして衣服のはだけさせる音……。男子たちは血走った目を画面に向けてながら、ズボンを脱ぎ下ろしていた。露わになった陰茎は血管が浮き上がるほど脈打ち、その標的を千枝へと定めていた。そしてゆっくりとこすり始める……。

「へへ……千枝ちゃぁん……！」

「パンツかわいい……俺のちんこにかぶせてくんねえかなあ？」

「ちっちゃいおまんこ……女子小学生の……っ！」

千枝に向かって卑猥な言葉が次々と飛び交う。ここにいるのは青少年たちではなく欲望猛り狂う雄……そして千枝は守られるべきかよわき存在ではなく、雄たちを誘惑する雌であった。幼い体の中にある魔性……それはまだ未熟な雄たちの野獣性を刺激する。

そんな雄の視線が注がれていることなど知ることもなく、千枝はパンツを持ったまま立ち上がる。小物入れから見えるローアングルの肢体……なだらかな恥丘と美しい一本すじが再び露になった。

……ランウェイ上の千枝が、鮮やかにターンをして見せる……。

<<んっしょ……>>

そして、全裸の千枝も同じようにこちらに背を向けた。小ぶりの可愛らしいお尻が男たちの眼前にさらされる。

「おお……っ！？」

「ケツちっちえ～」

小さいながらも張りのある尻は、ローアングルからはさらに扇情的に映る。しなやかな背中から丸みのある尻へのラインは美しく、光を受けて輝く白い肌は触れたら溶けてしまいそうな柔らかさがあった。

「はあ……はあ……ッ！」

そんな少女の体も、今は男たちを興奮させるものでしかない。穴があくほど千枝の尻に視線が集中し、彼女の下半身は獣の欲望に犯される。

千枝は片足を上げ、パンツを通す。ふりふりとこちらに尻を振り乱す。その姿に男たちのニヤついた顔は止まらない。

そんな視線など気づくわけもなく、千枝はパンツをもう片方の足に通そうとする。

<<んっと……！>>

その時、片側に千枝の重心が大きく傾いた。

<<やっ……！？>>

バランスを崩し、千枝は片足を上げたままケンケンをする。パンツが足にからまり、後ろに後ずさる……。

……その光景は、まるでスローモーションのようだった。千枝の体……下半身がカメラに向かって迫ってくる……！

ぶ に ゆ う う う ん

「うはああッ！？？」

男たちは一斉に声を上げた。モニター画面いっぱい、千枝のお尻が押し付けられたのだ。

弾力のあるやわらかい肌はレンズに密着する。可憐な一本筋は左右へと広げられ、乙女の秘密が余すことなく映し出された。

……ピンク色に色づき、まだ誰も侵入を許していない陰唇……。その上にセピア色のアナルがひっそりと咲いている。そのしわの一本一本が、数えられるほど映像は鮮明だった。

そしてまたしても千枝は映像の中で時を止める。おまんことお尻の穴を晒したまま、彼女は静止したのだ。

「……ッ！！！」

男たちは声を出すこともなく立ち上がった。そしてモニターの向かっていきり立った男根を向ける。

「へへへ、千枝……千枝ちゃあん……ッ」

「ぶっかけてやるからな……！！」

「うおおッ……！！」

彼らは、一気に竿をしごくと大量の精を解き放った。

びゅる！　びゅるるうううッ！！！！

「うっくう……ッ！！」

痺れるような快感に男たちは歯を食いしばった。すべてを搾り取られるように、夥しい量の精液が放出される。それは千枝のおまんこの映像へと、容赦なく降りかかる。

びちゃびちゃと四方から降り注ぐ白濁液は、千枝のおまんこをあっという間に塗りつぶした。

映像が再開される。

<<や、やあん……>>

千枝は映像の中で、四つん這いの姿勢になっていた。パンツを膝にひっかけ、尻を高々と上げた姿勢……。

無意識にカメラに向けた顔は羞恥に染まり、媚びるような雌の表情になっていた。

「うっ……」

びゅるっ……！

そのあどけない顔に背徳感を抱いたのか、一人の男子が残っていた精液を吐き出した。それは千枝の顔にかかり、とろりと滴り落ちていく。

「うわッ、ったねーなお前ら！！」

部屋に響く嘲笑の声。それは人間の声ではなかった。ここにいるのは獣……女子小学生に欲望をぶちまける数匹の雄であった……。

「おいっ！ もう一回最初からやれよ！」

「千枝ちゃんのおっばい、もっかい見てえ～」

「ケツもっと映せ！」

男たちは再び群がっていく。映像の中で千枝は彼らの目にさらされ続ける。

何度も何度も……。

……もう一つの画面では、千枝が観客に向かってウィンクをした。

彼女にあった、輝かしい未来は、もうない。

佐々木千絵は汚され続ける――。顔も知らない男たちに、今日も、明日も、これからも……永遠に……。

〈了〉